



大学における感染症対策



大学は、勉強やサークル活動などさまざまなことにチャレンジできる場です。しかし、病原体の媒介により引き起こされる感染症に対しては、多くの学生が密閉された空間に集う頻度が高いため、注意すべき環境にあると言えます。保健管理センターでは、学生個人および大学を守るため、感染症に関するさまざまな啓発活動を行っています。今回は、大学において高頻度で流行しやすい感染症に加え、大学で発生させてはならない感染症について説明します。



毎年、主として冬の寒い時期に流行する感染症です。典型的な場合は、のどの痛みや咳など感冒と同じような症状に伴い、発熱、頭痛、関節痛などの全身症状が急激に出現します。インフルエンザというと「高熱」のイメージがありますが、実は37℃台の微熱や平熱のインフルエンザも少なくありません。「熱が高くない」というだけでインフルエンザを否定するのは早計であり、そのような状況で大学に出てくると感染拡大の大きな原因となります。インフルエンザにかかった方と接触した後に症状が出た場合は、熱が高くなくても必ずインフルエンザを念頭において行動するようにしてください。インフルエンザに罹患した場合は学校保健安全法に基づき「発症後5日間かつ解熱後2日間」を経過するまでは出席停止となります。



一般的に「嘔吐下痢症」と呼ばれることが多いようです。ウイルスの感染によって引き起こされることが多く、特に、ノロウイルスは感染力が非常に強いのが特徴です。症状は下痢、嘔吐、腹痛、発熱などですが、残念ながらウイルス自体を殺す特効薬はありません。罹患した場合は免疫力を高めるために「全身の安静」を保つとともに「胃腸の安静」を保つことが必要です。保健管理センターでも感染性胃腸炎の学生を診察するケースが多々ありますが、頻回に下痢をしているにもかかわらず、当日の食事について尋ねてみると「ラーメンを食べた」「カレーライスを食べた」などの返答を聞くことも少なくありません。嘔吐や下痢が強い場合は食事を控え、症状が落ち着くまで水分摂取のみとし、回復期に入ってから消化のよい食事をとるようにしてください。症状が強い場合は脱水症に陥ることがありますので、すぐに医療機関を受診するようにしてください。トイレなどで接触感染をするケースも多いため、症状が改善するまでは自宅で安静にしてください。



大学で出してはならない感染症の代表格です。空気感染し、感染力が非常に強いのが特徴です。発病すると高熱や発疹が出現し、肺炎や脳炎を併発して命にかかわることもあります。本邦において、近年、麻疹患者が増加していますが、訪日外国人旅行者による麻疹ウイルスの持ち込みがきっかけで集団発生するケースが多いようです。予防するには、麻疹ワクチンを2回接種することが極めて重要となります。多くの大学において、医療系や教育系の学生に対するワクチン接種を実施していますが、大分大学では保健管理センターが中心となり、非医療系・非教育系学部学生に対しても母子手帳のチェックを行い、ワクチン接種が十分でない学生については呼び出しを行い、接種を強く推奨しています。



結核も麻疹と同様に空気感染するため、発病者からある程度離れていても、密閉された空間にいた場合、感染する可能性があります。欧米の先進国の多くは、結核罹患率が人口10万人あたり10人以下の結核低蔓延国であるのに対し、日本は13.3人(2017年)と未だ結核中蔓延国であり(図1)、いつどこで結核患者が出て不思議ではありません。もし、発病した場合は早めの治療が必要ですし、周囲への感染を最低限に抑えるためには早期発見が何より重要です。2週間以上咳が続く場合は「感冒が長引いているだけ」と決めつけるのではなく、必ず医療機関を受診し胸部レントゲン検査を受けるようにしてください。

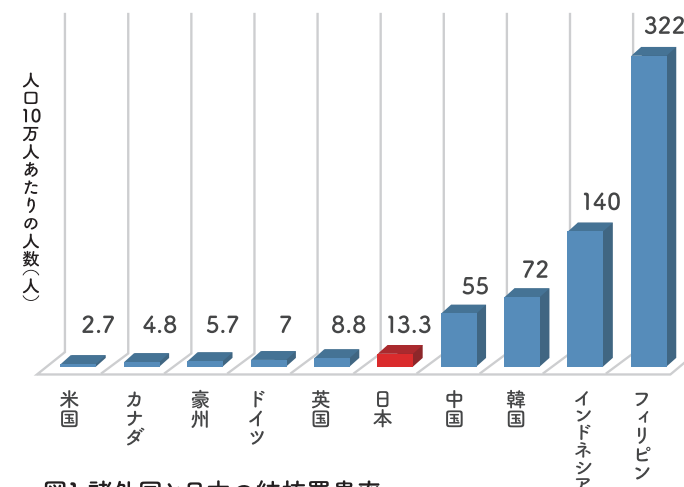


図1.諸外国と日本の結核罹患率

厚生労働省 平成29年 結核登録者情報調査年報集計結果についてより改変引用。日本は2017年次、諸外国は2016年次をあらわす。



保健管理センターからのお知らせ

保健管理センターでは、入学後、各学部の新入生に対しこれらの感染症やその対策について健康セミナーや基礎ゼミなどで詳しく説明しています。また、保健管理センターホームページや掲示板(図2)などで感染症に関する注意喚起を随時行っていますのでご覧になってください。インフルエンザの検査も可能ですので(図3)、症状が疑わしい場合は、検査を受けるようにしてください。



図2.掲示板

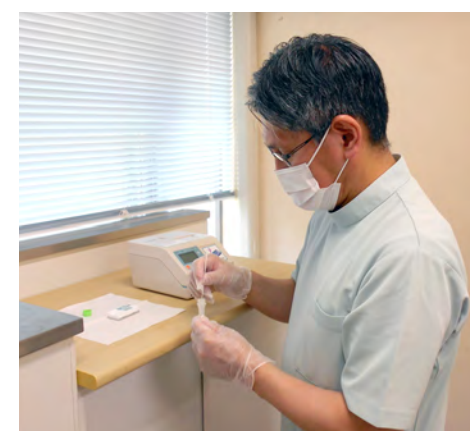


図3.インフルエンザの検査